



Title	伝聞における判断性、及びその特性：「そうだ」「らしい」「とのことだ」「ということだ」「と聞く」の談話表現を中心に
Author(s)	澤西, 稔子
Citation	日本語・日本文化. 2002, 28, p. 29-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/11363">https://doi.org/10.18910/11363</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

## 伝聞における判断性、及びその特性

### ——「そうだ」「らしい」「とのことだ」「ということだ」 「と聞く」の談話表現を中心に——

澤西 稔子

#### 1. はじめに

伝聞表現については仁田(2000)は認識のモダリティを伝聞と判定のモダリティに下位分類し、伝聞は命題内容の仕込み方・入手の仕方に関わるものであり、伝聞は大きく、(1) 命題たる事態は第三者からの情報である (2) 第三者からの情報を聞き手に取り次ぐという伝達性を基本に有しているとし、又益岡(1991)は「らしい」の分析の中でその伝聞的な働きについて「伝聞の場合は、他からの情報をそのまま伝えるだけの表現であり、表現者の判断は問題にならない」としている。

森山(1995)にも、伝聞の他者判断性、対話性等について既に詳しい考察があり、伝聞では話し手によって情報の捕らえ方は示されていても情報内容の構築はなく、伝聞の機能は既に言語的に成立している情報を話し手がどのようなものとして利用するかという機能であるとしている。

ここではこれらの先行研究をふまえつつ、はたして伝聞表現そのものに話し手の判断性がないのかという観点から考察をすすめ、それぞれの伝聞表現の特徴を考えていきたい。ここでは又談話における代表的な伝聞表現として「そうだ」「らしい」「とのことだ/だった」「ということだ/だった」「と聞く/聞いている」を中心に考えていく。

#### 2. 他者判断性という認識

森山(1989)は認識ムード形式<sup>1)</sup> 以前のコトガラに当たる部分が純粹に話し手の判断によるものかどうかを調べるために「思うに」が共起するかどうかのテスト

トをし、

- (1) 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるかもしれない。
- (2) 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるに違いない。
- (3) 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるようだ。
- (4) 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるみたいだ。
- (5) \* 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるそうだ。
- (6) ?? 思うに、そろそろ来年あたり、恐慌がくるらしい。

のように「思うに」と情報把握の形式で「そうだ」「らしい」が共起しない点から、「そうだ」「らしい」が話し手における情報の把握のしかただけを表し、話し手の判断と基本的には無関係であるとしている。森山（1995）では更にこれを受け「伝聞形式においては、話し手がどういいう言語情報を得ているかという認識だけが示されるのであって、伝聞内容自体は、話し手自身が生成する判断ではないのだと言える」とし、このことを「伝聞の他者判断性」と呼んでいる。

伝聞に対する解釈は寺村（1984）の「ある事態について、自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に伝える言い方」という認識が一般的なものと言えるだろう。この点から見ると「思うに」つまり「私が思うことに」という表現が伝聞表現と共起しないことはあたりまえのことであり、このことを一つの根拠として「そうだ」「らしい」を話し手の判断とは別に話し手の情報の把握のしかただけを表す標識であると言い切れるであろうか。

- (7) 山田さんが「こちらにはいつ来られる？」って言っていますよ。
- (8) 田中さんは「悪かった」って言っていますよ。
- (9) 取引先が「早く仕上げてくれ」って言っていますよ。

といったような実際の会話で多用される直接引用的伝聞表現であるなら「伝聞の他者判断性」と言うことができるだろう。寺村（1984）も「伝聞のソウダは『他から伝え聞いたことを伝える』といっても誰か特定の人が、ある特定のときに、特定の場所で実際に口に出して言った、そのことを伝えようとする表現ではないらしいことに気づく。」とし「田中サンハ『私が悪カッタ』ト言ッテイル」を「田中サンハ悪カッタソウデス」と言い換えることが出来ない点を指摘している。(7)～(9)の直接引用的伝聞表現もここで取り上げる伝聞表現に置き換えてみると次

のようになる。

- (10) 山田さんがこちらにはいつ来られるか知りたいそうです。
- (11) 山田さんがこちらにはいつ来られるかとのことです。
- (12) 田中さんは自分が悪かったと反省しているそうです。
- (13) 取引先が早く仕上げてほしいそうです。
- (14) 取引先が早く仕上げてくれとのことです。

つまりここで扱う伝聞表現は直接引用的伝聞表現とは違い、話し手が仕入れた情報を聞き手に伝える際には何らかの知的情報処理を施した上で、情報を再構築し伝達をしているということが言える。この認識の上で、「そうだ」に代表される伝聞表現が「他者判断性」を持つと言い切れるのかどうか、次に具体的に考察していきたい。

### 3. 伝聞の話し手による判断性

#### 3.1 伝えられる情報と伝聞表現との関係

まず伝聞判断性について考えるために伝聞表現で伝えられる情報と伝聞表現の関係を見ておきたい。

神尾 (1990) は『情報のなわ張り理論』の中で下記の a～h までの条件を示し、それ以外の情報は「自分は直接知らない」「他の人が言った、あるいは言っていること」となり、間接形 (断言を避けた不確定な文形、伝聞含む) を使うと指摘している。

- a. 話し手自身が直接体験によって得た情報
- b. 話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報
- c. 話し手自身の確定している行動予定及び計画などについての情報
- d. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表す情報
- e. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報
- f. 話し手自身の職業的あるいは専門的領域における基本的情報
- g. 話し手自身が深い地理的關係を持つ場所についての情報

### h. その他、話し手自身に何らかの深いかかわりをもつ情報

この情報においては確かに神尾の指摘するように日本語では直接表現を使う<sup>2)</sup>。

そして日本語では、寺村（1984）の「ある事態について、自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に伝える言い方」の「自分は直接は知らない」情報というのは、上の神尾の指摘する、a～hの話し手自身が自分自身のコトガラとして完全に把握できており話し手自身が確言的に言い切れる情報以外ということになる。そしてその上記の条件以外の、外から仕入れた情報を話し手が聞き手に伝える際の伝達手段の一つとして伝聞表現が使われているということをまずここで確認しておきたい。

次に話し手が外から仕入れる情報であるが、まず次の2種類に分類しておきたい。それは

- A. 伝えようとしている情報が確定的なものと話し手自身が見なせる情報
- B. 伝えようとしている情報が確定的なものと話し手自身が見なせない情報である。

A の情報というのは具体的には

#### ① メッセージ性の強いもの

これは話し手が聞き手へのメッセージ、伝言としてとして受け取った情報などである。

#### ② 話し手がマスコミ等の媒体を通して得た情報

テレビ、ラジオ、新聞、出版物、インターネット等のマスメディアを通じて獲得した情報。

#### ③ 特定の場から得た情報

日常生活の中で話し手が情報源となる人々との関係の中から得た情報のうち、情報源となる人物（一人或いは複数の人物）が確定的と判断している情報…情報源にとって神尾条件のa～hにあたるものである。

といったものが考えられる。

それに対してBの情報というのは

#### ④ 特定の場から得た情報

日常生活の中で話し手が情報源となる人々との関係の中から得た様々な情

報のうち、情報源となる人物（一人或いは複数の人物）が確定的と判断出来ない事柄。その代表的なものとしては噂であろう。

そこで話し手がこれらの情報を聞き手に伝える際に、伝聞表現を使った場合、どのような伝聞表現を使っているのか見ていきたい。

まず①の例として、話し手が電話等で受け取った「木村さんは明日来られない」というメッセージを聞き手に伝える場合

① 木村さんは明日来られないそうだ／そうです…○

木村さんは明日来られないらしい／らしいです…○

木村さんは明日来れないとのことだ／ことです…◎

木村さんは明日来れないということだ／ことです…○

木村さんは明日来れないと聞いている／聞いています…？

次に②の例として、話し手がテレビのニュースで知った「今度の台風はかなり大きい」という情報を聞き手に伝える場合

② 今度の台風はかなり大きいそうだ／そうです…○

今度の台風はかなり大きいらしい／らしいです…○

今度の台風はかなり大きいとのことだ／ことです…△

今度の台風はかなり大きいということだ／ことです…○

今度の台風はかなり大きいと聞いている／聞いています…？

そして③の例としてアン本人から直接聞いた話として「アンさんは来年帰国する」を聞き手に伝える場合

③ アンさんは来年帰国するそうだ／そうです…○

アンさんは来年帰国するらしい／らしいです…○

アンさんは来年帰国するとのことだ／ことです…△

アンさんは来年帰国するということだ／ことです…○

アンさんは来年帰国すると聞いている／聞いています…？

そして④の例として山田以外の情報源から山田に関する噂話として聞いたものとして聞き手に伝える場合

④ 山田さんは結婚するそうだ／そうです…△

山田さんは結婚するらしい／らしいです…◎

山田さんは結婚するとのことだ／ことです…×

山田さんは結婚するということだ／ことです…×

山田さんは結婚すると聞いている／聞いています…×

以上を簡単に表にしてみると次のようになる。

	そうだ	らしい	とのことだ	ということだ	と聞く
①	○	○	◎	○	?
②	○	○	△	○	?
③	○	○	△	○	?
④	△	◎	×	×	×

以上のように伝達しようとする内容と伝聞表現の関係を見ていくと、伝えようとしている情報が④のように確定的なものと話し手自身が見なせない情報を伝達する際には「らしい」以外の伝聞表現はどちらかといえばあまり適当とは言えない。つまり伝聞表現はAのような、話し手が伝えようとする情報を確定的なものと判断した場合に、その情報を聞き手に伝達する際に使われているということが言えると思われる。ただ伝聞表現の「らしい」は次の寺村の表が簡潔に示すように、本来は推量のモダリティである。その判断根拠が他から得た情報であるか、あるいは自分の観察によるものかその割合の振り方によって伝聞表現と受け取れたり、あるいは推量表現と受け取れたりもする。このような性質がBのような確定的なものと話し手自身が見なせない情報を伝える場合には有効に使われるということであろう。

	だろう	そうだ 予想	ようだ	らしい	そうだ 伝聞
根拠が自分の観察による	3	3	2	1	0
根拠が他から得た情報による	0	0	1	2	3

つまりここで扱う伝聞表現は基本的には聞き手以外から仕入れられた、話し手が確定的と見なせる情報を聞き手に伝える際に使用される表現であると言える。

### 3.2 伝聞の持つ判断性

次に伝聞表現の判断性について考えてみたい。

例えば、留学生の質問で『今度のテストの範囲はどこまでですか』という問いが教師にあった場合、それに対する答えとして、

- (15) 20 課までです。
- (16) 20 課までだと思います。
- (17) 20 課までのようです。
- (18) 20 課までらしいです。
- (19) 20 課までだそうです。
- (20) 20 課までにちがいありません。
- (21) 20 課までかもしれません。

といった答えが考えられる。この場合留学生は何らかの具体的判断の提示を求めている。その際に(19)の「そうだ」まではその答えとしてその場に相応しいと言えるが、(20)「20 課までにちがいありません。」は話し手の言うなれば主観的な観測を表す表現であり、ここで示すべき判断としては不適當であると言え、同様に(21)「20 課までかもしれません。」はこの場合「まだはつきりわかりません」と同義である。(19)「20 課までだそうです。」の場合は試験の直接の責任者ではないが、その関係者としてその情報は確定したものとして話し手が把握している場合、ここで示すべき判断として「そうだ」が使われていると言えるだろう。つまりここでの「そうだ」は単に話し手がどういう言語情報を得ているかという認識だけが示されるのではなく、話し手が自ら生成した内容ではないが故に確言形を使うことは出来ないが、自分が仕入れた情報が確定的なものであるという話し手の判断も合わせて聞き手に示していると言える。

このことは「そうだ」は概言のモダリティの「ちがいない」「かもしれない」には後接するが、「だろう」「ようだ」「らしい(推量)」には後接しないことも関連してくると思われる。「ちがいない」「かもしれない」は仁田<sup>3)</sup>では蓋然性判断、益岡<sup>4)</sup>では「事態が成り立つ蓋然性」を示すモダリティに分類されている。用語、整理の仕方は多少の違いはあるが蓋然性を示す「ちがいない」「かもしれない」は上記の留学生の例が示すように、話し手の具体的判断を示さなければならない状況下では相応しいとは言えない。

- (22) 彼は来るかもしれないそうだ。…○



(23) 彼は来るにちがいないそうだ。…○

(24) 彼は来るだろうそうだ。…×

(25) 彼は来るようだそうだ。…×

(26) 彼は来るらしいそうだ。…×

上記のように、「ちがいない」「かもしれない」が「そうだ」と共起し、「だろう」「ようだ」「らしい（推量）」と「そうだ」が共起しないことは、3.1の寺村の表が示すように、「だろう」「ようだ」「らしい（推量）」の判断根拠が自分の観察を中心にしたものか、「そうだ」のように他から得た情報によるものかという違いがありこそすれ、話し手の判断を示すモダリティ「だろう」「ようだ」「らしい」と同様に、状況により「そうだ」そのものも、話し手の判断を表す場合もありえるということを示唆しているのではないか。

そこで「やはり」と「そうだ」が共起する点を考えてみたい。

「やはり」は概言のムード形式（寺村分類による）すべてと共起する。そして伝聞の「そうだ」「らしい」とも共起する。

(27) やはり彼は来られないそうだ。

(28) やはり彼は来られないらしい。

この「やはり」の解釈としてまずは、コトガラ（命題）の中での情報源の判断、つまり「やはり、彼は来る」と情報源が判断し、それを受け取った話し手がそのまま聞き手に伝えるという解釈の仕方である。しかし、一方で「やはり」は「そうだ」に係っていく話し手の判断とも受け取れる。つまり話し手は何らかの事情で彼が来られないという情報を受け取る。その情報はこの場合、話し手自身の体験ではないので確言形を使うことは出来ないが、仕入れた情報が、かねてからの話し手自身の考えと同じであったというような場合にこのような発話になるだろう。このことから伝聞表現では話し手がどういいう言語情報を得ているかという認識だけが示されるだけでなく、その伝えようとしている情報が話し手にとってある種、確信的であるという判断も聞き手に示していると言えるのではないか。

森山（1989）は更に情報把握の形式（そうだ、らしい）の形式が話し手の判断とは基本的に無関係であるという観点から、キャンセル可能性を指摘している。

それによると、

(29) 彼が部屋にいるかもしれないが、それは違うと思う。

(30) 彼が部屋にいるようだが、それは違うと思う。

とは言えないが、

(31) 彼が部屋にいるそうだが、それは違うと思う。

(32) 彼が部屋にいるらしいが、それは違うと思う。

と言えるという点である。この点に関し仁田 (2000) にも同様の指摘がある。仁田は認識のモダリティを伝聞と判定のモダリティに下位分類する証左として

(33) A 紙によれば、今回は証人喚問に応じるそうだが、僕はそう思わない。

(34) \* たぶん今回は首相も証人喚問に応じるだろうが、僕はそう思わない。

(35) \* もしかしたら今回は証人喚問に応じるかもしれないが、僕はそう思わない。

(36) \* どうやら今回は証人喚問に応じるようだが、僕はそう思わない。

という文例を使い、(34) ~ (36) は話し手の判断判定作用を経た結果生み出されたものであるが、(33) の自らの判定作用そのものを経ていない伝聞では、その成立を非認しても矛盾は起らないとし、伝聞は描き取られている言表事態が第三者からの情報によったものであるという命題内の仕入れ方に関わっているだけであるとされている。

確かに (31) や (33) の「そうだ」は仕入れた情報をそのまま提示するという伝聞本来の役割が前面に押し出された表現であると言える。が、上記の例に「やはり」を付け加えると

(37) やはり彼は部屋にいるそうだが、それは違うと思う。

(38) やはり今回は証人喚問に応じるそうだが、僕はそう思わない。

が他の概言表現と同様に言えなくなる。

つまり伝聞表現は仁田の

「伝聞は、命題内容の仕込み方・入手の仕方に関わるものである。伝聞は大きく、(i) 命題たる事態は第三者からの情報である、(ii) 第三者からの情報を聞き手に取り次ぐ、という伝達性を基本に有している」

とする役割が基本的のものであると言えるが、

《そこに示されている情報は話し手自らが構築したものではないということを開き手に提示しつつ、聞き手に示しているコトガラ（命題）は話し手が情報処理し再構築した、確定的なものであるという話し手の判断をも聞き手に示す》という機能も同時に併せ持ち、単なる伝達という機能だけが前面に押し出されることもあれば、その状況により話し手の判断をも伝聞表現を使うことによって聞き手に示せるという二面性があることを指摘しておきたい。

#### 4. 伝聞表現の特徴

##### 4.1 形態・統語的特徴

次に今までの考察をふまえ、個々の伝聞表現の特徴を見ていきたい。そこでまずここで取り扱う伝聞表現の形態・統語的特徴を整理しておきたい。

- ① 否定形をとるもの…ナシ
- ② 過去形をとるもの…とのことだ・ということだ・と聞く
- ③ 疑問形をとるもの…とのことだ・ということだ・と聞く
- ④ 接続助詞（が、から、し、けれども）がつくもの  
…そうだ・らしい・とのことだ・ということだ・と聞く
- ⑤ 接続助詞（ので、のに等）がつくもの  
…とのことだ・ということだ・と聞く
- ⑥ 連体修飾になるもの…と聞く
- ⑦ 命令・疑問・意志・勧誘につくもの…とのことだ・ということだ

	そうだ	らしい	とのことだ	ということだ	と聞く
① 否定形をとるもの	×	×	×	×	×
② 過去形をとるもの	×	×	○	○	○
③ 疑問形をとるもの	×	×	○	○	○
④ 接続助詞（が、から、等）がつくもの	○	○	○	○	○
⑤ 接続助詞（ので、のに等）がつくもの	×	×	○	○	○
⑥ 連体修飾になるもの	×	×	×	×	○
⑦ 命令・疑問・意志・勧誘につくもの	×	×	○	○	×

この表からかなりそれぞれの特徴がつかめられると思われる。

## 4.2 「そうだ」と「らしい」

3.1で、4つのタイプの情報を聞き手に伝える際に「そうだ」も「らしい」もどちらの表現も使えることを見たが、それではその二つの表現の間にはどのような微妙な差異があるのか、ここでは話し手の心理等から考えてみたい。

聞き手に伝聞表現を使って情報を伝える際に、話し手は瞬時に無意識にとってもいいかもしれないが自分の置かれている状況を把握する。つまり聞き手（情報の受け取り手）と自分との関係、そして伝えるべき情報と聞き手との関係、そしてそこから派生してくるであろう自分への影響である。これらのことを瞬時に判断し、情報と自分との取るべき距離を瞬時に推し量り、そのことは使うべき伝聞表現の選択という形で反映される。この時の話し手に働く判断を次のように整理してみたい。

- a. 情報内容から情報を積極的に聞き手に知らせたいという判断  
…これは寺村の「そうだ」に関する記述の中の「多分相手は興味を持って聞くだろうと期待して言う表現」に当たるであろう。
- b. 情報内容から話し手がその情報ないしは聞き手から距離を置いておきたいという判断  
…これは情報内容から聞き手へ何らかの影響（主にマイナスのものが多いだろう）を与えるという判断が働いている場合である。
- c. 状況を話し手なりに把握しているが、あえてそれに深く関わらず話し手が把握している情報を淡々と聞き手に伝えようという判断

例えば

- (39) 木村さんは明日来れない
- (40) 今度の台風はかなり大きい
- (41) アンさんは来年帰国する

という話し手にとっては確定的な情報を伝える場合、aやcの判断下では「そうだ」も「らしい」も使えるが、例えばbのような距離を取っておきたいという判断を話し手がした場合どちらかといえば「らしい」のほうが相応しい場合が多い。

つまり「そうだ」は伝えるべきコトガラが確定的なものであるという話し手の判断があるからこそ直球的に話し手に投げ込まれる表現であり、aやcのような状況下でこそ使われるのが相応しく、反対に状況的判断から何らかの心理的プレッシャーが話し手にかかった場合に「らしい」のほうがより相応しい表現といえる。このことは3.1④のような噂

(42) 田中さんは結婚する

という情報を伝える際に、話し手にとって確定的な情報ではないこと、又それ故にその情報から距離を取っておきたいという姿勢を聞き手に示す必要があり、それを表現するためには「らしい」が一番据わりのよい表現となる。これは「らしい」の本来は推量のモダリティであるという側面が、情報から少し距離を取るという心的態度を表現する際に現れていると考えたい。

つまり「らしい」は話し手の伝えようとする情報が、話し手にとって確定的なものにせよ、確定的なものでないにせよ、その情報から距離を置いたスタンスを聞き手に対して示す傾向の強い表現であると言えるであろう。

#### 4.3 「そうだ」の特性…「だろう」との比較から

次に「だろう」との比較から「そうだ」の特性を見ておきたい。

「だろう」を金田一は「助動詞のうち、活用しない、あまり助動詞らしからぬものだけが、主観的表現の語であり、」「助動詞のうち、う・よう・まい・だろうなどの終止形だけしかないものは話者のその時の心理を主観的に表現するのに用いられるものである」とし、さらに寺村もそれを受け「だろう」を主観性の強い「話し手自身の発話時の心の状態の直接的表現である」としている。又その後の研究でも「だろう」はその形態、統語的特徴から、主観性を表現したムード形式の最も基本的なものとして、真性モダリティ、一次的モダリティ等<sup>5)</sup>、に分類されている。一方「そうだ」も4.1の表からもわかるように、過去形を取らない（話し手の発話時に限定される）、否定形を取らない、「～こと」の内部要素（つまり客観性の高い内部要素）と成り得ない等、「だろう」と同様の特性を有していると言える。

寺村は「そうだ」が自分の立場を、客観的に「私は…と～が言っているのを聞

いた」のように主述分化の形で表わすのではなく、主述未分化の形で表出されたものであり、「そうだ」と、事実として客観的に報告する表現である「…と言う／言った／言っている」の違いは、「だろう」と「私は…と思う」の違いと本質的には同じことが見られると指摘している。

そして又3.1の寺村の表からその話し手の判断の根拠となるものについては「そうだ」…自分の観察による=0 他からの情報によるもの=3  
「だろう」…自分の観察による=3 他からの情報によるもの=0  
のように全くの好対照を見せているのも非常に興味深い。

以上のような「だろう」との比較からも「そうだ」の《主観的な表現》という特徴が浮かび上がってくるとと思われる。

#### 4.4 「とのことだ」・「ということだ」…「そうだ」との比較から

「とのことだ」という表現が一番据わりがいいのはやはり3.1の〈③メッセージ性の強いもの〉であろう。

- (43) 今朝山田さんからお電話がありまして、  
今日の会議には出席できないかもしれないとのことでした。
- (44) 今朝先方より連絡がありまして、  
今回の仕事は出来るだけ早くしあげてくれとのことでした。
- (45) 今朝先方よりお電話がありまして、  
あの件はもう一度よく考え直したほうがいいのではないかとのことでした。

この表現の形態、統語的特徴は、「ということだ」も同様であるが、(43)のように伝聞以外の概言のモダリティとも共起すること、(44)(45)のように過去形「ことだった」の形を取ること、又命令、意志、疑問といった表現とも共起できる点である。

- (46) 今朝先方より連絡がありまして、  
出来るだけ早く仕上げてほしいそうです。  
出来るだけ早く仕上げてくれとのことでした。
- (47) 今朝先方よりお電話がありまして、

あの件はもう一度考え直してほしいそうです。

あの件はもう一度よく考え直したほうがいいのではないかとのことでした。

(46) (47) のように「そうだ」に言い換えた場合それぞれの伝聞表現の特徴がよく表れている。それぞれ直接引用的表現と違い、仕入れた情報に対して何らかの知的情報処理が施された結果、聞き手に伝えられるわけであるが、その処理の仕方が、「とのことだ」のほうはかなり引用に近く、情報源の意向等を残した客観的な、言い換えれば話し手中心の主観的な総括判断を避けた表現が使われていると言える。このことは情報に対して出来るだけ客観的であろう、言い換えれば情報から距離を保っておきたいとする話し手の心的態度が表出したものと言えるであろう。それに対して「そうだ」のほうのコトガラ（命題）は「とのことだ」と比べるとかなり直截的な言い回しになっている。

又「とのことだった」という過去形が使われるというのも単に時制を反映した表現というだけでなく

- (48) 今朝先方より連絡がありまして、  
出来るだけ早くしあげてくれとのことでした。  
出来るだけ早くしあげてくれとのことでした。

- (49) 今朝先方よりお電話がありまして、  
あの件はもう一度よく考え直したほうがいいのではないかとのことです。  
あの件はもう一度よく考え直したほうがいいのではないかとのことでした。

のように同じ状況下で「ことです」「ことでした」と両方の表現を使うことも十分可能である。この「ことだ」「ことだった」に表れる微妙な差というのは、「ことだ」→「ことだった」にかけて、話し手の中でより情報に対し客観的であろうとする判断が強くなるということであろう。つまり 4.2 の

- b. 情報内容から話し手がその情報ないしは聞き手から距離を置いておきたいという判断

のように話し手が判断すればするほど、「そうだ」→「とのことだ」→「とのこと

だった」とより客観化が進んだ表現が選ばれることになる。

いずれにしてもこの「とのことだ/だった」の表現には話し手が伝達情報から距離を保っておこうとする心的態度が表現されていると言え、出来るならば積極的にその情報に関わらず、4.2の

c. 状況を話し手なりに把握しているが、あえてそれに深く関わらず話し手が把握している情報を淡々と聞き手に伝えようという判断

のような判断下で話し手→聞き手へと伝言を伝えているだけだというような話し手の意向を聞き手にも悟らせるという一面がある。

(50) インターネットで調べてみたら、A大学のランキングは8位だということです。

(51) あの大学は環境もよくて、寮にも比較的入りやすいということです。

(52) 彼女の演奏は素晴らしいけれど恣意的だという批判があるということです。

この「ということだ」という表現の特徴は基本的にはいわゆる田窪 (1989) の話し手・聞き手の非共有的知識をさすのに使われるメタ用法であろう。(50) は

(53) インターネットで知りえた情報は(というのは)、A大学のランキングは8位だということです。

のように言い換えることができ、「という」で示される聞き手にとって未知のコトガラ (命題) を聞き手に説明するという機能が根底にあると考えられる。

(54) インターネットで調べてみたら

A大学のランキングは8位だということです。

A大学のランキングは8位だそうです。

(55) あの大学は環境もよくて、

寮にも比較的入りやすいということです。

寮にも比較的入りやすいそうです。

(56) 彼女の演奏は素晴らしいけれど、

恣意的だという批判があるということです。



恣意的だという批判があるそうです。

のように「そうだ」との比較からはやはり「とのことだ」と同様に話し手の情報に対する客観的な姿勢というものを聞き手は感じ取る。

(57) A 大学のランキングは8位だということでした。

もし仮にA大学関係者の前でその情報を伝達する場合、情報を確定的なものと話し手はみなしてはいるものの聞き手にとってはあまり喜ばしくない情報であろうと話し手が判断した場合(57)のように「でした」を使うことで、その情報から出来るだけ距離を取っておきたいという話し手の意向をも表現しているとも言えるであろう。

つまり「とのことだ」にさらに説明の特性が加わることにより、話し手が情報対してより十分距離をとった上での客観性を持たせた表現であると言えるだろう。

#### 4.5 聞く・聞いた・聞いている

この表現は3.1の表からわかるように他の伝聞表現とは違った状況下で使われる。例えば

(58) ここで来週の金曜日にパーティがあると聞いたんですけど本当でしょうか。

(59) Q: 山田さんの出発は結局いつになったんでしょうか。

A: 来月の10月になったと聞いていますよ。

のように、話し手が情報源から得ている情報を発話の時点で開示するという状況で使われる用法が特徴的なものではないかと思われる。

(60) Q: 事故の直接の原因は何ですか。

A: ガス漏れによる爆発だと聞いております。

というような外部の人間に対して、その関係者もしくはその責任者がその事故について説明をしなければならないような場面では出来るだけ無責任な印象を与えずに的確に今把握している情報を聞き手に提示しなければならない。他の伝聞表現では

(61) ガス漏れによる爆発だそうです。

(62) ガス漏れによる爆発らしいです。

と状況次第では無責任にさえ聞こえてしまう場合があるだろう。

つまりこの表現は情報源→話し手→聞き手とベクトルが連続するのではなく、情報源→話し手で一旦途切れ、聞き手に対してその段階で話し手が把握している情報を出来るだけ客観的に開示するという状況下で使われる表現である。話し手がその責任を明確にした上で話さなければならない場合や、話し手が把握している情報はこれだけであるという線を聞き手に対して明確に示す必要がある場合などに使われる表現であろう。

## 5. まとめ

以上伝聞表現は単なる情報伝達の機能以上に、状況により、話し手の判断性も示しえるという二面性を持ったものと考え、その前提の下でそれぞれの伝聞表現の特性を考察してきた。

「そうだ」は「とのことだ」「ということだ」に比べ形態的にも、統語的にみてもかなり制約が多い。しかしそのことが「そうだ」の使用範囲を狭めているわけではなく、1.2 で見たように伝えるべき情報に制約はなくほとんどの情報を伝達することができ、むしろ話し手が確定的と判断したコトガラを直截に積極的に伝達できる表現であり、「だろう」と同じように上記の意味でいたって主観的な伝聞表現であると言えることができるであろう。「らしい」は基本的には「そうだ」とほぼ同じ特徴を持ち、日常会話では「そうだ」よりも多用されているとの印象さえあるが、本来の推量という機能が、コトガラ（命題）に対する話し手の距離感を示すことになっていると思われる。反対に「とのことだ」「ということだ」は形態的にも統語的にも「そうだ」に比べ比較的自由的な振るまいを見せるが、それは言い換えれば、話し手の情報に対する距離を投影させた表現であるとも言える。

つまりコトガラ（命題）部分及び、伝聞表現形態への制約が多い場合は話し手の情報への心的距離は近いと言え、言い換えれば話し手によって積極的、主観的に情報処理が行われ発話されているが、反対にコトガラ（命題）の部分及び、伝聞表現の形態的への制約が少ない場合は話し手の情報への心的距離は遠いと言え、言い換えればコトガラに対し話し手が客観的に情報処理しようとしていると

いうことが言えよう。そして「そうだ」→「とのことだ」→「ということだ」そして「ことだ」→「ことだった」の順で話し手の情報に対する客観化が進むということが言えると思われる。山梨 (1995) は日常言語のイコン的な表現には

- A 知覚・認知のプロセスを反映する傾向
- B 事象の生起の順序関係を反映する傾向
- C 事象変化の間接性・直接性を反映する傾向
- D 対人関係的な距離を反映する傾向

があり、D の場合は、言葉の物理的な距離ないしは長さが、対人関係の隔たりを反映しているとして、「引き受けてもらえますか→引き受けてもらうことができますか→引き受けてもらうことができますでしょうか」等の例を示している。ここでの「そうだ」→「とのことだ」→「ということだ」あるいは「ことだ」→「ことだった」も上の観点からも説明できるとと思われる。

つまり伝聞表現は、話し手が伝えようとしている情報に対する話し手の心的距離の取り方によって微妙に使い分けられていると言えるであろう。

#### 註

- 1) 森山用語。森山 (1989) で認知的モードは狭義判断、情報把握、状況把握の3種に分類されている。
- 2) 但し伝聞表現について見直してみると
  - b. 話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報
  - d. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表す情報
  - e. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報

の条件下であっても、日常生活では直接表現ではなく伝聞表現を使う場面が往々にして見られる。例えば、bで

僕はことばを覚えるのがとても早かったそうなんです。

と話し手の幼少の頃、自分自身のことではあるが、記憶が曖昧な場合には「そうだ」を使うことがあるし、d,eでは

i お父さん、今度大阪に転勤になるそうだよ。

ii 今度大阪に転勤になるんですよ。

のように場の構成メンバーによって伝聞表現が使われたり、そうでなかったりする場合がある。iの場合、場の構成メンバーが〈近〉すなわち〈内〉の関係、例えば家族での会話で母親が子ども達に話すという状況下では、伝聞表現が使われることも多く見られる。しかし、iiのようにその場の構成メンバー、聞き手等が〈遠〉つまり、〈外〉の関係の場合は神尾の言う直接形が使われることに注意しなければならないだろう。

又ニュースなどを伝達する際には日本語では直接表現を使わないが、ある映像が繰り返し放映され、あたかも自分自身の体験であるかのような感覚が話し手の中に生じれば条件a.話し手自身が直接体験によって得た情報に相当することになり、話し手は『ビルにジェット機が突っ込んだんだよ』のように伝聞表現を使わず直接形を使うであろう。

- 3) 仁田 (2000) は判定のモダリティの下位分類のうちの概言を  
推量…だろう 蓋然性判断…かもしれない、ちがいない  
徴候性判断…ようだ、らしい、に分類している。
- 4) 益岡 (1991) は真偽判断モダリティの下位分類、断定保留形式のうち一次的モダリティとして「だろう」、二次的モダリティ形式を  
①事態が成り立つ蓋然性を示すもの…ちがいない、かもしれない  
②判断に至る様式を表わしたもの…ようだ、らしい、はずだ  
に分類している。
- 5) 益岡 (1991) では一次的モダリティ、仁田 (2000) では真性モダリティという用語が使われている。

#### 参考文献

- 井上和子 (1983) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』12-11 (大修館書店)
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』大修館書店
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能——引用文の3つの類型について——」『文藝言語研究 言語篇』十三 筑波大学
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 中畑孝之 (1992) 「不確かな伝達——ソウダとラシイ——」『三重大学日本語学文学』三
- 仁田義男 (1992) 「判断から発話・伝達へ——伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77
- 早津恵美子 (1988) 「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』4月号 (明治書院)
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版

- 森山卓郎・仁田義男・工藤浩（2000）『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店
- 森山卓郎（1995）「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』26
- 森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房

〈キーワード〉伝聞の判断性，伝聞の二面性

## **The Function of the Reporting Models**

Toshiko SAWANISHI

In Japanese, we use a reporting modal in a reporting clause, when we report someone's speech, message, or information from the mass media to hearer. Normally, we use our own words rather than directly quoting in a reported clause and in precedent studies, it is said that the function of the reporting modal is only to report the statement.

But the theme of this paper is to show that we can imply even our own conviction of the statement by these reporting modals and also, we can imply a certain mental distance by choosing a approximate modal in a reporting clause, when we want to be mentally away from the statement, which you have to report to a hearer.